

目的・目標

- 交流及び共同学習に係る取組を基軸とし、多様性への理解を深めるなど、共生社会の担い手育成に係る取組を充実させる。
- 小学校又は高等学校と特別支援学校の教職員間の連携を深め、交流及び共同学習に係る取組を通じて、小学校及び高等学校における特別支援教育に係る校内体制強化を図る。
- 地域の学校ニーズに応じた特別支援学校のセンター的機能の充実を図る。

学校運営 連携校

岡山県立東備特別支援学校(対象:知的障害)
備前市立西鶴山小学校
岡山県立備前緑陽高等学校

隣接型

カリキュラム・
マネージャー

元特別支援学校校長

取組概要

【本事業での取組のうち、特に力を入れて取り組んだ点】

- ・小学校又は高等学校と特別支援学校の教員連携強化 (相互授業参観等)
- ・交流実績少数高等学校における持続可能な取組の検討
- ・特別支援学校のセンター的機能を活用した校内研修の実施
- ・年間指導計画等の調整による既存の交流及び共同学習の見直し
- ・共同学習の側面を意識した授業づくり

【特色ある取組】

- ・地域と連携した単元指導計画等の創造(備前焼や古墳を共通教材とした取組、地元企業による出前授業を活用した取組)
- ・地理的に離れた学校間の取組
- ・高等支援学校と高等学校の交流ではなく、実態差の大きい集団における交流及び共同学習の実施



①交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方の検討

発展の方向性

- 各種指導計画の調整
- 共同学習の側面を意識した授業作り
- 既存の内容の発展又は未実施教科等における交流及び共同学習を位置付けた年間指導計画の作成
- 地域と連携した単元指導計画等の創造



【岡山県立東備支援学校と備前市立西鶴山小学校の取組】

対象学年/教科等の位置付け		内容
岡山県立東備支援学校	備前市立西鶴山小学校	
1年/算数	1年/生活	「あつめよう、かぞえよう」
1年/生活単元学習	1年/課外	「一緒に遊ぼう」
2年/音楽	2年/音楽	「手遊び、歌唱、合奏、身体表現、鑑賞」
3・4年/体育	3・4年/体育	「フープ送り、リズムジャンプ」、「山登り」
5・6年/図画工作	5・6年/総合的な学習の時間	「備前焼」
5・6年/体育	5・6年/総合的な学習の時間	「ボール運びリレー、表現運動」

【岡山県立東備支援学校と岡山県立備前緑陽高等学校の取組】

対象学年/教科等の位置付け		内容
岡山県立東備支援学校	岡山県立備前緑陽高等学校	
1年～3年/職業	2年/学校設定教科	「備前焼の窯出し」
1年～3年/社会・道徳	2年/福祉	「地域資源を活用した学習（車椅子体験）」
1年～3年/保健体育・道徳	2年/福祉	「地域資源を活用した学習（サッカー教室）」
1年～3年/職業	2年/工業	「出前授業（職業人としての心構え、働く意義、自動車の模型作り）」

②現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

【岡山県立東備支援学校（小学部）と備前市立西鶴山小学校】

- ・相互授業参観
- ・校内研修（仲間づくり、多様性理解）
- ・学校祭見学

【岡山県立東備支援学校（高等部）と岡山県立備前緑陽高等学校】

- ・相互授業参観
- ・学校見学
- ・オープンスクール参加
- ・校内研修（障害特性の理解と支援について）
- ・学校祭見学
- ・販売学習参観



本事業の成果

- ・学校間交流後に実施した教職員アンケートでは、次の項目において、肯定的な回答をした教職員が実施前と比較して平均20%増えており本事業の成果を感じている。
「交流及び共同学習が共生社会実現のために必要」/「交流及び共同学習は子どもの将来の地域生活のために必要」/「学校間交流校の双方の子どもたちが共に学ぶことで、お互いの子どもの理解が進む」/「交流及び共同学習で地域資源を活用することは子どもにとって地域や地域の人と関わる経験や学習を積み重ねるよい機会である」
- ・共同学習の側面も意識しながら授業作りを行うことができた。
- ・学校運営連携校の教員間で良好な関係が築け、お互いに意見を出し合いながら授業づくりができるようになった。
- ・打ち合わせや振り返り等を通して、互いの学校の児童生徒理解につながった。
- ・普段の学校生活では見せることのない姿を見ることができ、生徒に対する教職員の見方が変わった。
- ・教職員からは、「課題は色々あるが、やってみることが大切」、「一緒に活動することは心配ないのかもしれない」等、交流及び共同学習の実施に対して前向きな声が聞かれるようになった。
- ・特別支援学校の教員が行う授業を参観して、特別支援教育の視点を活かした授業改善につながった。
- ・児童生徒からは、「最初は嫌だなと思っていたけど、実際行ってみるととても楽しかった」、「いろいろな人がいるから、それぞれにあったコミュニケーションがある」、「障害のある人たちのことを知っていききたい」、「窯の中に初めて入ったが、想像以上に狭くてびっくりした。狭い理由は、色をちゃんと付けるためらしい。初めて知った。」などと交流の感想だけでなく、教科の学びがあったこともうかがえた。

【課題】

- ・所管教育委員会が異なるため、打ち合わせや振り返りを行うオンライン会議の実施において制約を受けている。
- ・各種指導計画の調整が難しい。
- ・小学校や高等学校に在籍する特別な支援が必要な児童生徒への対応に係る更なる専門性向上の取組が必要である。
- ・学校間交流用の指導略案の形式が定まっておらず、学校運営連携校同士で指導目標や配慮事項の確認や、通常学級で特別支援教育の視点を活かした授業を行っていくための教師の振り返りが十分に行えていない。
- ・特別支援学校との学校間交流を実施していない小・中・高等学校が多く、特別支援学校と学校間交流を行うにあたっての「はじめての一步」を踏み出すための取組について、イメージをもつことができていない学校が多い。

【今後の展望】

- ・クラウドの活用等により、対面や電話以外の打ち合わせ方法を模索する。
- ・高等学校側の交流及び共同学習の計画に係る負担を軽減して交流を進めるために、高等学校側がもともと計画していた学習に特別支援学校も参加していく方向で検討していく。
- ・特別支援学校におけるセンター的機能を積極的に活用した校内研修及び事例検討会実施する。
- ・学校間交流用の指導略案の様式を作成する。
- ・学校間交流の公開授業を行ったり、事業報告会を実施したりする。

課題

今後の展望